

## *The Public Image* に見る外面性の意義

中 村 嘉 男

### The Significance of Externality in *The Public Image*

Yoshio NAKAMURA

Muriel Spark の小説を、彼女と共に20世紀の後半を代表する女流作家 Iris Murdoch の小説と比較すると、まず気づくことはその短さである。Spark の小説には novel というより novella といった方が相応しいものが多いのだ。これは、Murdoch が登場人物の内面を詳細に描くのに、Spark は外面に表れたものを主に描くからである。内面には、それが表現されたとたんに変化してしまう移ろいやすさが見られるが、このような不安定さよりも外面の確かさを Spark はより多く利用したわけだ。この外面の重要性を作品のテーマとして表現しているのが、1968 年に出版された *The Public Image* である。この小説のタイトル「対外イメージ」がすでに典型的な外面になっているが、その他にも貝の殻とか赤ん坊とか演技などが重要な意味をもつ外面性として描かれている。それらはすべて主人公の Annabel Christopher に関わるもので、彼女の言動を通してそれらの意義が明らかにされていく。これに対して、彼女の夫で俳優兼脚本家の Frederick とその親友 Billy は、外面を軽視して自らの内面を大切にする陰湿な男たちである。彼らは、自分たちを認めてくれない現実を受け入れようとしない曲がった自尊心の持ち主なのだ。

外面性はこの作品では一貫して積極的な価値を与えられていると思われるが、その代表である Annabel の 'Tiger-Lady' (あるいは 'Lady-Tiger') という対外イメージは、不思議なことに、ほとんどの研究家から否定的に捉えられてきた。例えば、Velma B. Richmond は 'Only through the destruction of Annabel's public image can she possibly gain an integrity.'<sup>1</sup> と述べ、Richard C. Kane も 'But ultimately Frederick's wife learns that the Tiger-Lady must indeed die in order for Annabel Christopher to live.'<sup>2</sup> と同じ考え方をしている。彼らの見方には、妻の対外イメージを虚像として否定する Frederick のそれに通じるものがある。自分の内面的価値を根拠もなく信じる Frederick は、Annabel が外面に囚われていると言って馬鹿にした。だが、この価値判断に行き詰まって彼は自殺に追い込まれる。そして自殺の直前に妻あてに書いた手紙の中で彼女を中身のない貝殻にたとえた。この貝のイメージは、話者が物語の最後で再度取り上げ、肯定的なイメージに定着させたこともあって、ほとんどの研究家から高い価値を与えられている。つまり、Annabel の対外イメージは否定されているのに、それを守り通そうとした彼女を比喩的に表す貝殻のイメージには積極的な意味が与えられているのだ。この矛盾を抱えた見方は、作品における外面性の意義の綿密な検討のあとでは、到底支持できないことが分かるだろう。

## I

Annabel は数年前まではほとんど無名の端役専門の女優だったが、イタリアの映画監督 Luigi Leopardi からその目の表情の豊かさを認められ、主役に抜擢されて ‘English Lady-Tiger’<sup>3</sup> として売り出される。これが彼女の対外イメージになるが、さらに彼女の私生活から仲むつまじい夫婦像が捏造されて、初めの対外イメージに織り込まれる。あとで作られ付け加えられたイメージは、Annabel の ‘tiger-quality’ (42) が人前では抑えられ、夫婦の夜の生活で発揮されるというものである。従って、Annabel の対外イメージは、映画から作られたものと、それに合わせて彼女の私生活からでっち上げられたものの二重構造になっているのだ。Frederick が耐えられなくなるのは、後者のイメージが広まっていったからである。

しかし、夫婦仲の悪化の原因は、ほとんど一方的に Frederick にあったと言える。彼はもともと妻の知性を見くびっていて、彼女に対する自分の優越性を自明のことだと思いこんでいた。ところが、彼女がどんどん有名になり、自分が仕事ももらえないで彼女に養ってもらえるようになると、彼女への侮蔑的な態度をさらに強めていくのだ。自分の優秀性を認めてくれない現実が自分の蔑視している妻を逆に高く評価したため、彼の自尊心は深く傷つけられ、反発したわけである。Annabel が自分の演技に自信を持ち始めて、賢くなる必要もいい演技をしようと思う必要もない、ただ、‘to be there in front of the cameras’ (16) だけでいいんだと言うと、Frederick は過度に苛立ち反発して、この考えに ‘shallowness’ しか認めず、‘You can't act. You're just lucky.’ とヒステリックに彼女をこき下ろす。Annabel がここで言っているのは、演技をうまくやろうとするより、カメラの前では開き直った方がいいぐらいのことだろう。演技指導を受けたあとなどでカメラの前で落ち着くには、このように外面を全面的に信じることは、大切な心構えの一つであると言える。

Frederick が Annabel の考えに異常に反発したのは、一つには、彼が演技について次のような考えをもっていたからだろう。

He was firm in his opinion that an actor should be sincere in the part he played, and should emotionally experience whatever he was to portray, from the soul outward. (25)

要するに Frederick は、演技という外面の善し悪しを決めるのは「真剣な」内面だと信じていたのだ。その彼には、妻の演技は単に ‘manners’ に従うだけの ‘a sort of cheat’ しか見えなかった。それで彼は彼女に ‘You never feel the part, do you?’ (26) と文句を言う。心から真剣に役作りしてないだろうといちゃもんを付けたわけである。真剣かどうかを判断できるのは外面を通してだという当たり前の事実には気づかないで、彼はここで妻の内面にまで干渉したのだ。内面は、他人のものはもちろん自分のものでも、客観的に計量しようがない。Frederick が自分の真剣さをいくら主張しても、外面によらないでそれを判断する手だてはないのである。Annabel の真剣さを彼女の演技をしっかりと見ないで疑うことはできないはずなのだ。彼にそれができたのは、彼が妻を次のように見ていたからだ

と思われる。

Whenever any of his old friends began to suggest that her acting had some depth, or charm, or special merit, he silently nurtured the atrocity, reminding himself that nobody but he could know how shallow she really was. I know her, he thought, inside out. They don't. (26)

いかに身近な存在とはいえ、妻といえども他者である。その妻を Frederick は知り尽くしていると思い込んでいるのだ。これは、神ならぬ人のしてはならない思い上がりである。だが、現実を受入れられないで自分の内面を絶対化していけば、他者に対する軽視はすぐに生じてしまうのである。

しかし、内面の価値を誤った形で信奉する Frederick も、やがてその拠り所に頼り無さを感じ始める。そしてそのことを妻にも気づかれるようになる。Annabel にも分かってきたことは、'a private self-image of seriousness' (33) を育んできた Frederick にとって、外面を重んじる彼女がそれに対する 'a threat' になっていたということである。こうして Frederick は妻に対する自分の信じて疑わなかった優越性を彼女自身から崩されていく。みじめな気持が表情にも表れ始め、妻のことが 固定観念になっていく。特に 'Lady-Tiger' のイメージ強化のために仲むつまじい理想的な夫婦像が広められてから、彼は精神的に一層追い込まれていき、それが全くの虚像であるが故に壊さなければならないと思いこむようになる。言わば彼は内面の底無し沼に沈んでいき、ついに、恐ろしい計画を立てて実行することになるのである。

その計画とは、殉教者の遺跡を発掘中の教会に高く組まれた足場から飛び降り自殺をすると同時に、妻が自分の帰りを待っているアパートで狂乱パーティが開かれるように手配しておくという念の入ったものだった。さらに彼は、妻を狂乱パーティに明け暮れて家庭を顧みないあばずれ女に仕立て上げる手紙を五通も残しておく。偽りの対外イメージを壊すためなら別の偽りのイメージを作り上げておかまわないと思ったのだろうか。しかし前にも触れたように、夫婦の対外イメージを虚像にしていたのは、彼自身の病んだ心と行いに他ならなかった。Annabel 自身は一家の頼もしい稼ぎ手として頑張ってきたし、特に赤ん坊が生まれてからの彼女は母としても申し分がなかった。妻としても彼女は、自己中心的な夫に対してできるだけ心を開くようにしていた。そのたびにひねくれた対応をしたのは Frederick だったのである。彼の閉ざされた内面こそが二人の対外イメージと私生活との乖離を大きくしていた元凶だったのだ。

これに対して Annabel は自分のイメージを守るためにいつも努力してきた。特に夫の自殺後は、崩壊の危機にさらされたそのイメージを守るため大奮闘する。この一連の彼女の闘いについて Kane は、それが 'petty acts of concealment and subterfuge'<sup>4</sup>だと貶している。もし Kane の言う通りなら、私たちは物語の殆ど終わり近くまで主人公の「つまらない行動」に付き合わされることになる。実際に私たちが目撃するのは、Annabel が自らの対外イメージに恥じない逞しい女性になっていく過程である。彼女は 'English Lady-Tiger' というイメージが気に入っていて、何度か Frederick に 'What's wrong with a public image?' (32) とか、'What' wrong with my public image' (47) と尋ねていた。彼女はこ

れを答えを求める気もなく、つまりそのイメージは悪くはないという気持で尋ねていたようにみえる。しかるに Joseph Hynes は、この問いに彼女が自ら答えなければならないと言う。そればかりか、Hynes はその答えを彼女に代わって自分で、'What's wrong with Annabel's public image ... is that she has presumed to live as if separate in reality from it.'<sup>5</sup>と出している。が、これは全く一面的な見方だといえよう。繰り返しになるが、Annabel は自分の対外イメージの虚像性をできるだけ小さくしようと努めていたのだ。Frederick の非協力的な対応でそれは現実から一層離れていったが、虚像の部分は、彼女の対外イメージの中でも夫婦の私生活から捏造されて、あとで付け加えられた部分であった。'Tiger-Lady' というイメージ自体は、Frederick の自殺後、Annabel の懸命な闘いによって、だんだん彼女の実像になっていったのである。

## II

Annabel の 'tiger-quality' が現実には発揮され始めるのは、Frederick の自殺によって彼女の対外イメージが致命的に損なわれる危険が生じてからである。彼女は夫が自殺する時間に合わせて狂乱パーティが開かれるようにしていたことを察知し、それが 'blood on her public image' (88)になるように仕組まれたこともすぐに理解する。夫はまるで妻に呪いでもかけるように自らの陰湿な企みに従って命を絶ったのだ。しかし Annabel は、これに直面して怯むような女性ではなかった。彼女はいわゆる 'Sparkian'<sup>6</sup>であり、邪悪さに敢然と立ち向かい、妥協しない徹底した闘いのできる女性だったのである。

ところが、Annabel が懸命に闘っているのに、その闘いの意味が分かっていない研究家は何人もいる。その結果彼らは、彼女の闘う相手の Frederick や Billyではなく、彼女自身の欠点をあげつらうのに忙しい。例えば Faith Pullin は、昔の思い出に感傷的になる Annabel に 'Oh, stop posing,' (21) と言う Billy を彼女の 'reality tester'<sup>7</sup>だと言っている。Pullin には、ここで非難されるべきは、人間関係の展開を端から否定する Billy の対応だということが全く分かっていないのだ。'reality' は、エゴイズムに支配されてそれを見失いやすい私たちが相手を思いやることによってしか見えてこないが、Billy の Annabel に対する態度には人間的な暖かさはかけらも見られない。また Kane は Frederick について、彼が悪魔的だけれども 'didactic' なのは、結果的に彼の自殺が Annabel を対外イメージから解放したからだと言っている。<sup>8</sup>言わば Frederick は妻が自由になる手助けをしたというわけだ。当然のことながら、このような考えでは彼の本当の恐ろしさは伝わってこない。彼の怖さは、繰り返しになるが、外面を軽視して自分の内面を絶対化するところにある。それは、大儀のために自分や他人の命を犠牲にするテロリストたちの精神構造と無縁ではない。外面は、それが信じられなければ、世界がすべて闇になってしまうほど大切なものである。私たちが赤ん坊やペットに接して大きな喜びを感じるのは、彼らが全面的に外面的な存在だからである。彼らには、外面に隠れた内面は存在しないのだ。外に現れたものがすべてであり、それを信じきっても誰も裏切られることはない。全面的な信頼関係がここではいとも簡単に築かれるのである。

対外イメージはこのように大きな意味を持つ外面の一部である。それを良いイメージに

しようと努め、それに恥じない言動をとることは人の果たすべき義務である。もちろん Annabel も自分の対外イメージを大切にすることが、それは単に女優としてのキャリアのためだけではなく、それが気に入っていたからでもある。特に夫の自殺後、彼女は邪悪なものには徹底して敵対する 'Sparkian' の一人として、夫や Billy に代表される悪に負けるわけにはいかなかったのだ。それで彼女は病院で夫の死体確認をしたあと、深夜にもかかわらず自分のアパートでいきなり記者会見を開こうとする。朝刊に最初に掲載される記事の内容が自分と自分の対外イメージの運命を決めると考えたのである。その記者会見の席で Annabel が利用したのは、まだ殆ど付き合いのない近所の人たちと自分の赤ん坊である。この席で彼女はわが子の行く末を案じる聖母マリアを意識して悲しみの母を演じようと思い、悲しみの効果を近所の人に高めてもらおうとしたのだ。実際、赤ん坊を抱いてさめざめと泣く Annabel を見て隣人の未亡人が 'it was(is) a terrible thing to be left a widow with orphans.' と言ってくれるし、それに合わせて他の隣人たちも 'how true this was(is)' と口々に言い合い、Annabel が狙った効果を高めてくれるのだ。

ところが、ここにその効果を台無しにしようとする者が現れる。それは、Annabel のかかりつけの医師の幼い娘である。この子は Annabel が周囲の人たちの涙を誘うのを見て、'The actors can make themselves cry, they have to learn to do it.' (101) と余計なことを言う。この子は内面が殆どすべて外に表れ出てしまうほど幼いが、残念なことに、大人の知恵を一部身につけて、外面を疑うほど成長していたのである。この小賢しい子供について Pullin は 'as unattractive as the truth itself'<sup>9</sup> と述べ、暗にその子の発言を真実だと仄めかしている。が、果してこれは正しい見方だろうか。確かに Annabel はここで隠している内面を持っている。が、それは妥協できない悪と闘おうとする内面であり、決して他者を陥れようとするものではない。彼女の涙にしても、亡くなった夫のために流されていないという意味では空涙と言えるが、そのことだけでその欺瞞性が証明されるわけではない。夫の自殺という衝撃に加え、それが彼の恐るべき企みだったと分かったいま、乳飲み子を抱えた彼女が嘆き悲しむことに、なんの不思議もないのである。それを本音を隠した演技と見るのは、底意地の悪い Frederick 的な見方だと言えよう。

奇妙なのは、実に多くの研究家がこの Frederick 的な考え方をしているということだ。恐らくこれは、*The Public Image* が出版されて間もなく出された Frank Kermode の書評に影響されたためかもしれない。そこで Kermode は、'Is it better to be oneself, meagre and valid, or fiery-eyed, marvelous and phoney?'<sup>10</sup> という素朴極まりない二分法を出していた。この考えに従えば、華やかな俳優の仕事は 'phoney' だというおかしな話になってしまいかねない。この見方から Whittaker を始め多くの研究家が、Annabel の女優としての生き方と対外イメージを共に否定的に捉えるという流れができたように思われる。彼女の女優としての生き方や仕事が 'phoney' なら、そうでない女優の生き方は余程立派なものにならざるをえないだろう。

彼女の女優業とは対照的に肯定されているのが彼女の赤ん坊との関係である。赤ん坊は彼女にとって 'the only reality' (53) であり、その存在を通して彼女は 'a sense of being permanently secured to the world' を感じる事ができたのだ。だが、赤ん坊と俳優の演技との間には見逃せない重要な共通点がある。それは、両方とも、外面がすべてだということだ。だからこそ私たちは、それらに純粋な愛とか感動を感じることができるのである。

演技の外面性は、Annabel が自らの対外イメージの危機にも関わらず読みつづける脚本の中に顕著に認められる。その脚本には演技の外面についてしか書かれておらず、演じるときの気持の持ち方については一切述べられていないのだ。内面の動きはすべて外に表すことが俳優の仕事なのである。

その脚本に従って映画制作する Luigi は、'What is personality but the effect one has on others? Life is all the achievements of an effect.' (52) と言う。彼にとっては、人が他者に与えるイメージがその人の人格にほかならず、'living up to what the public thinks of you' は決して偽善ではなく、まっとうな生き方なのだ。言わば彼は、外面より内面に価値を置く Frederick の対極に位置していると言える。Annabel はもちろん Luigi にずっと近い立場にいるが、彼と考えが全く同じというわけではない。最初のうち彼女は自分は'Tiger-Lady' ではないという思い消すことができず、そのイメージと自分との差に悩むのだ。Luigi はこの悩みを笑い飛ばし、'Come and live a little with me, and you soon will be.' (52) と自信満々に言う。Annabel の対外イメージを作り上げた彼は、'It's what I began to make of you that you've partly become.' と豪語さえするのである。

しかし、彼が創造主のように豪語できたのも初めのうちだけである。まもなく Annabel は彼に、'After all, that image was not so far from the truth, she was a lady-like, genteel sort of tiger: but still, indeed a tiger.' (142) と思わせるほどの成長を遂げるのだ。神にも似た力の持ち主と思われた Luigi と Annabel の力関係は逆転し始める。Luigi の助言や予想は不適切であったり間違ったりし始めるのだ。例えば、Annabel のアパートで大量に催眠剤を飲んで倒れていた Dayna という女性が翌日発見されたとき、彼は狂乱パーティの噂が広まることは避けられないと思い込み、Annabel の対外イメージは致命的な打撃を受けるに違いないと予想する。そして、噂の波は止めて見せると言う Annabel に彼は、'Stop the orgy story? How do you stop the waves of the sea?' (152) と強い疑念を表明したのである。ところが Annabel は、その波が起こるか起こらない内に、それを止めてしまうのだ。彼女は、女優としてだけでなく脚本家としての才能も発揮してこれを成功させる。彼女は初めから夫が自殺したとは認めず、彼を慕う女たちに追い回され、頭がおかしくなって足場から落ちて死んだという筋をでっち上げて、病院に搬送された Danya をその女たちの一人に仕立て上げていたが、さらに、彼女を病院に訪ねたとき集まってきた報道陣に向かって演出効果たっぷりに次のように言う。

I am going to visit poor Danya, ... because I forgive her. The only orgy was the orgy of her own making. The other women ... I forgive the other women. And I forgive the one, also, who sent my husband to his death. (160)

'forgive' という言葉が多用されているのは、Annabel が Luigi からその言葉がイタリアの民衆に強く訴える力を持っていると教えられたため、彼女はここでその言葉を実に効果的に利用する。つまり彼女は、夫を死に追いやった女たちを「許す」と公言することにより、夫が自殺ではなく事故で死んだことを自明の事実として仕立て上げたのだ。もちろん、同時に彼女は狂乱パーティは催眠剤を多量に飲んだ Danya の妄想だということも、確立された事実にしてしまう。彼女のこのパフォーマンスをテレビの中継で見ていた Luigi は彼

女を絶賛する。そして早々と 'The orgy story is killed.' (172) と結論付けるのだ。Annabel は演技者としてだけでなく、脚本家や演出家としても優れた才能を発揮しはじめるのである。彼女の外面は確かに隠された内面を持ってはいるが、それら二つの面は悪と闘うという一点で一致していると言えよう。

ところが、Annabel が無事に対外イメージを守り通せたと思われた正にその時、夫の親友で彼女とも長年の知り合いの Billy が彼女をゆすり始める。彼は Frederick が自殺する前に書いた手紙五通のうち四通を誰よりも先に見つけて、すべてを Annabel に手渡してくれていたが、そのコピーを密かにとって、それを種に莫大な金を要求したのだ。これらの手紙はいずれも、Annabel が狂乱パーティに明け暮れ、心配する夫をあざ笑って精神的に追い詰めた、彼女を厳しく糾弾していた。手紙は Annabel が対外イメージを守り通せるまではゆすりの種としての価値は未定だったが、守れる見通しがたった今、Billy は親切なる友人の仮面をとり、卑劣きわまりない本性をあらわにしたのである。

### III

Frederick は Annabel の対外イメージを一気に壊そうとしたが、Billy は逆にそれが安定した人気を保つことを必要とした。Frederick が嘘を幾つも重ねて妻の対外イメージを壊そうとしたのに対し、Billy はその安定性に依存しながら、陰でそれを食べ物にしようとしたと言えよう。Frederick の内面重視は裏を返せば彼が外面を認識し気にしているということであり、だからこそ彼は妻の対外イメージを壊すために虚偽の外面をでっち上げて自らの命まで絶ったのである。これに対して Billy は、外面を信じるふりをしながら、それを利用して搾取することしか考えていない。彼にとっては、外面も内面も自分が勝手にできる対象でしかなかったのだ。

恐らくこの Billy の外面軽視が、窓の外に見えた顔の描かれた風船を見たときの彼の異常なまでの怯えの原因だったのかもしれない。風船は観光客が糸につけ空に上げて楽しんでいた 'toy balloons of Rome's night-life' (133) だった。それは頭と胴体と脚を持っていたが両腕のない 'an embryo ghost' のような不気味な形態をしており、外に出てはならない自分の醜い内面が不意に現れ出たように Billy には感じられたのではあるまいか。というのも、この少し前に彼は Frederick の手紙を Annabel に手渡していたが、そのコピーの存在を彼女が強く疑うため真剣になって怒り、それを誓って否定することによって醜い内面を抱え込むことになっていたのである。今はまだゆすりの種にはならないが、近いうちに邪悪な目的に利用できるかもしれないコピーを所持しながら、その事実を隠したために、彼の内面は極めて醜い、外には出せないものになっていたのだ。だからこそ、グロテスクな内面がそのまま外に出てきたような胎児型の風船にあれほど驚愕したのだと言えないだろうか。外面を汚い内面を隠すカバーにしている彼が、その外面から不意にしっぺ返しを食らった恰好になったと言っていいかもしれない。

Billy はこれと同じような驚愕をもう一度体験しなければならない。それは、Frederick の死の原因を調べる審問の場で、Annabel が例の手紙を判事に手渡したときである。彼女が自分の対外イメージに致命的な傷を与えかねない手紙を自分で外に出したために、

Billy の所有するコピーはもはや何の値打ちもなくなったのだ。Annabel は、隠しておけばいつまでもゆすりの種にされかねない手紙を白日の下にさらけ出すことで、Billy の企みを完全に打ち砕いたのである。Billy は外に絶対に出されてはならないものをいきなり見せられて、声もあげることなくただ愕然とするだけだった。

こうして Annabel は、外面を信じ、それに頼りながら闘うことによって、外面を悪用する Billy と Frederick を見事に打ち負かすのである。同時に彼女は、‘Tiger-Lady’ という自分の対外イメージ通りの女性になったと言えよう。殆どの研究家は、審問の場での手紙の提出によって Annabel の対外イメージは破壊されると見ている。これが的外れの助言や予想を繰り返している Luigi の見方と同じ見方だということに彼らは気づいていないようだ。Luigi は手紙の内容が知れ渡れば Annabel の名声は地に落ちてしまうと何度か彼女に警告していた。これを無視するような行動を彼女がとったのは、彼女が自分の対外イメージの維持を諦めたからだ、必ずしも言えないのではなかろうか。なぜなら、手紙の内容は Frederick の頭がおかしくなっていると言う Annabel の一貫した主張を裏付けているからだ。ただ一つ Annabel の主張と矛盾しているのは、Frederick がやはり自殺したのではないかという点である。なるほど彼は自殺の場を探していたのかもしれない。しかしその時に、Annabel が主張するように、彼が女たちに追い回されて足場から落ちたと考えてもそれほどおかしくはないのである。

いずれにせよ、この問題は小説の外の問題である。作品を論じるときに取り上げるべきことではない。問題にされるべき大切なことは、Annabel が名実ともに ‘Lady-Tiger’ になったということである。それは彼女が挫けることなく持続して闘ってきた結果であり、多くの研究家が仄めかすように、最後に審問の場で手紙を差し出すことによって対外イメージが破壊されて、初めて彼女の自己回復が可能になったわけではない。彼女の ‘Sparkian’ としての闘いは一貫しており、その変わらない目的は自分の対外イメージを守ることだった。それは初め自分の生活を守ろうとする個人的な闘いであったが、やがて個人のレベルを越えた重要な意味を持っていることが分かってくる。つまり、彼女の闘いは外面の普遍的な価値を表明していると理解されるのだ。面白いことに、外面を軽視していた Frederick は、自殺する前に彼女に宛て書いた手紙で、まるで外面を賛美するような美しい比喻を用いて彼女を非難していた。

You are a beautiful shell, like something washed up on the sea-shore, a collector's item, perfectly formed, a pearly shell—but empty, devoid of the life it once held. (141)

Frederick による妻についてのこの説明は、非難なのか褒め言葉なのか分からなくなっている。もちろん彼は妻を思い切り貶したつもりなのだろうが、逆に彼女の美点を際立たせる表現になっているのだ。‘empty’ は否定的な意味を表すつもりで用いられているが、実際は、内が空ろになり、外面だけになったものの美しさを印象づけている。貝殻の空ろさは Annabel の内面の生命の欠如を表しているのであろうが、彼女の内面は、物語の最後で話者が再び貝殻のイメージを用いて Annabel を説明したとき、次のようにその空ろな在り方が仄めかされているのだ。



The heavy weight of the bags was gone; she felt as if she was still, curiously, pregnant with the baby, but not pregnant in fact. She was as pale as a shell. She did not wear her dark glasses. Nobody recognised her as she stood, having moved the baby to rest on her hip, conscious also of the baby in a sense weightlessly and perpetually within her, as an empty shell contains, by its very structure, the echo and harking image of former and former seas. (192)

Annabel は審問判事に手紙を渡したあと、数時間の休廷中に荷物をまとめ、赤ん坊を抱えてこれからギリシャ行きの飛行機に乗ろうとしている。赤ん坊は外面的な存在として彼女に限りない安らぎと全面的に信じられることの充実感を与えていたが、その赤ん坊を腰に抱えながら彼女はまるでその子がまだお腹の中にいるように感じている。言わば彼女は内に外面的存在としての赤ん坊を感じているが、この状態が美しい貝殻の比喻によって表現されているのだ。「まさにその構造上、ずっと昔の海の響きとそれに耳を傾けているイメージ」をもつ空ろな貝殻は、内が外を、また外が内をそのまま表している。内にも外にもいると感じられている赤ん坊は、そこを様々な感情や思念が宿りながら通り抜けていく器である。望むらくは、そこを流れる生命はそれを貝のように美しい姿に造りあげながら、同時にその形に従って流れて欲しい。それぞれの生命はそれが持つにいたった形態に自然に沿うように生きているが、内面をもつ人間にはそれがなかなかできないことなのだ。しかし Annabel は、襲いかかった悪と闘うためではあったが、自らの対外イメージに背かない生き方をしてきたと言える。その結果、彼女の内実も ‘English Lady-Tiger’ という外形に恥じないものに成長してきた。内と外が一致してきた彼女には、もはや隠すものはなにもない。彼女がサングラスをかけていないのはその気持の表れと見ることもできよう。多くの研究家は、彼女がサングラスをしていないのは彼女がようやく最後に対外イメージから逃れて自分を取り戻すことができたからだとしている。この見方によれば、Annabel は物語の終わり近くまで自分を見失っていたことになってしまう。言うまでもなく、彼女は自分を見失ったことは一度もなく、一貫して彼女自身であった。演技とか対外イメージとか赤ん坊といった外面的なものを大切にしてきた彼女と、隠し続けられいつまでもゆすりの種として利用されかねない手紙をすんなり外に出した彼女は同じ Annabel であり、その彼女は外面がそのまま内面の表れである生き方の肯定者として肯定されている。そのことが物語の最後の全面的な解放感を可能にしているのである。

#### 注

- 1 Velma Bourgeois Richmond, *Muriel Spark* (New York: Frederic Angar, 1984), p.110.
- 2 Richard C. Kane, *Didactic Demons in Modern Fiction* (London and Tronto: Associated Univ. Presses, 1988), p.80.
- 3 Muriel Spark, *The Public Image* (London: Macmillan, 1968), p.13.  
以後、この小説からの引用はこの版により、括弧内にページ数を示す。

- 4 Kane, p.84.
- 5 Joseph Hynes, *The Art of the Real: Muriel Spark's Novels* (London and Tronto: Fairleigh Dickinson UP, 1988), p.150.
- 6 Frank Kermode, 'Antimartyr,' *The Listener* 79, 13 June 1968, 779.
- 7 Faith Pullin, 'Autonomy and Fabulation in the Fiction of Muriel Spark,'  
*Muriel Spark: An Odd Capacity for Vision*, ed. Alan Bold (London: Vision Press, 1984), p.72.
- 8 Kane, p.80.
- 9 Pullin, p.73.
- 10 Kermode, 778.